

令和 6 年 4 月 10 日現在

機関番号：15201

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13873

研究課題名（和文）インクルーシブ教育時代における規律の指導に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Teaching of Discipline in the Era of Inclusive Education

研究代表者

早川 知宏（Hayakawa, Tomohiro）

島根大学・学術研究院教育学系・助教

研究者番号：40868238

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は大きく二つある。一つには、ドイツを手がかりに、管理主義教育や子どもを抑圧することなど、ネガティブに語られることもある規律指導を、子どものニーズに応じて学校や学級を変革することを提起しているインクルーシブ教育の視点からとらえ直したこと、もう一つは、その指導方法が生徒会活動や学級会活動の中で行われており、学級や学校での共同決定を前提にした規律指導が行われることを明らかにしたことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

規律という用語は、管理や抑圧といった否定的なイメージが想起されることもあるが、現在のドイツにおけるインクルーシブ教育に基づく規律指導の議論を研究すると、生徒会活動や学級会を通して、子どもたちが司会をしながら、学級や学校のルールやきまりを共同決定しており、教師の指導としては、その活動を支援する重要性が提起されていることが明らかとなった。ドイツの動向を手がかりに、子どものニーズにตอบสนองすることで学校や学級の標準を子どもの視点から問い直す必要性を示すことができたことは本研究の学術的意義であり社会的意義であると考ええる。

研究成果の概要（英文）：There are two major achievements of this study, which is based on Germany. The one is that the teaching on discipline, which is sometimes talked about negatively, such as control-oriented education and oppression of children, has been reinterpreted from the perspective of inclusive education, which proposes the transformation of schools and classes according to the needs of children, and the other is that this study clarified that the teaching method is carried out in class meeting and student council, and the teaching on discipline is provided on the premise of joint decisions in the class and school.

研究分野：教育方法学

キーワード：規律指導 学級活動 インクルーシブ教育

## 1. 研究開始当初の背景

ドイツにおいては、戦後、教育実践においてナチズムの連想から規律(Disziplin)という用語は忌避されていた。しかし規律の忌避によって、授業妨害が問題になっていることを問題視したベルンハルト・ブエブは、罰則によって子どもを統制する管理的な規律論を提起し論争が起こった。このブエブの提起以後、規律の指導は、多様なニーズに応答しながら、子ども同士の規則の共同決定や対話を重視する方法も強調されるようになっていくが論争は終結していない。規律の指導は、学校におけるきまりに関わる指導であり、教育実践において必要とされながらも常に管理主義に陥る危険があり、そこから脱却した指導が求められている。ブエブ論争以後、ドイツにおいて規律指導の研究が活発に行われるようになり、インクルーシブ教育との関連からも規律指導のあり方が再構成される必要性も提起されるようになってきている。本研究は上述した背景により開始された。

## 2. 研究の目的

以上の背景を踏まえ本研究の目的は、障害のある子どもや多様な発達上の背景のある子どものニーズに応答するインクルーシブ教育時代の中で、どのように規律の指導を構想し、実践するかを明らかにすること、として設定した。

## 3. 研究の方法

研究の方法は主に文献研究と渡独調査(インタビューと授業観察)から構想されていた。

文献研究においては、ドイツで注目されている規律指導とインクルーシブ教育の文献を講読することを重視した。またインクルーシブ教育はドイツのみならず日本でも研究が進められているため、日本でのインクルーシブ教育の動向も文献調査した。

渡独調査については、研究年度の1年目と2年目に基礎学校の規律指導やインクルーシブ教育の実践を観察・分析し、また、教員へのインタビュー調査を実施することにより、ドイツでの規律指導の実態を明らかにする予定であった。そのうえで、理論的な研究と渡独調査を踏まえて、インクルーシブ教育時代における規律指導のあり方を明らかにする予定であった。

## 4. 研究成果

以上のような構想で研究を開始したのだが、2020年度以後、コロナ禍の影響により渡独調査は断念し、研究構想を変更することとなった。

文献研究は予定通り実施した。文献研究により、ドイツにおいては、きまりやルール決定の遵守、改廃に関わる規律の指導は、生徒会や学級会の中で行われていることが明らかとなった。そこで本研究では、特別活動の方向へ研究をシフトさせた。生徒会については、ドイツのバーデン・ヴュルテンベルク州の生徒会の活動に着目し、学校のルールやきまりについて学校全体で話し合う取り組みにおいて、生徒会が教師の指示に従って活動するのではなく、子どもたちが学校に対する提案や批判も述べながら、学校全体で合意形成に取り組む実践が行われていることが明らかとなった。

学級会については、地域を限定せず文献調査を行った。ドイツにおいては、子どもたちで学級会を運営することが求められていた。つまり、学級の中で、学級会の議長やタイムキーパー、書記、ルールの管理人といった役割を子どもたちが担いながら、学級でのトラブルを子どもたちで話し合い必要なきまりを決めることが目指されていた。特定の子どもにとって不利益が生まれたときには、再度学級会で話し合うことも実践されている。教師の指導性としては、話し合いの際には、受容や共感的理解に努め、子どもの困り感に寄り添いながら助言するという姿勢が重視されていた。また、教師と子どもたちで学級会を運営していくために、学級会での話し合いの仕方、議題の設定の仕方など、学級会の進行手順について、教師が一方向的に説明するのではなく、子どもたちに活動を通して定着させることが大切にされており、子どもたちが「なすことによって学ぶ」ことが求められていることがわかった。ドイツにおける文献研究により、規律の指導は、不利益を生まないようにすることや、子どもの困り感に寄り添ったり共感的理解に努めたりすることなど、誰も排除しないというインクルーシブ教育の理念が反映されていることが明確となった。

なお、上記の研究成果は以下の形で報告している。

#### 学会発表

- ・早川知宏「ドイツにおける児童会・生徒会活動の組織方法に関する一考察」中国四国教育学会第 72 回大会（於 広島大学）
- ・早川知宏「インクルーシブ教育における学級活動の検討」中国四国教育学会第 73 回大会（於 山口大学 ウェブ開催）
- ・早川知宏「ドイツにおける学級会活動の指導に関する一考察」中国四国教育学会第 75 回大会（於 広島大学）

以上の研究は、特別活動の内容に限定されるものの、子どもたちがきまりをどのように決定し、それを守ったり作り変えたりしていくのか、を検討するために、学級会と生徒会は欠かすことのできない内容であることが明らかとなった。ドイツにおける学級会や生徒会の学習プロセスやそこでの規律の指導のあり方をインクルーシブ教育の視点から明らかにできたことは本研究の一つの成果であろう。ただし、ドイツの学級会や生徒会の学習プロセスやその課題について明らかにしたのみであり、インクルーシブ教育の視点から、さまざまな背景のある子どもが話し合いに参加していくための指導方法や学習プロセスについては検討の余地がある。実際に現在、ドイツにおいては、合意形成の際に対話に参加できない子どもや特別なニーズのある子どもの意見や思いが反映されずに排除される危険も指摘されているが、こうした問題を解決するための指導のあり方については明らかにできていない。さらには、ドイツの指導方法を日本でどのように実践することができるかについても検討する必要があるため、今後さらなる分析作業を進めていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

|   |                     |
|---|---------------------|
| 1. 著者名<br>早川 知宏                         | 4. 巻<br>66巻         |
| 2. 論文標題<br>ドイツにおける児童会・生徒会活動の組織方法に関する一考察 | 5. 発行年<br>2021年     |
| 3. 雑誌名<br>教育学研究紀要                       | 6. 最初と最後の頁<br>67-71 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし           | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難  | 国際共著<br>-           |

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

|                                   |
|-----------------------------------|
| 1. 発表者名<br>早川 知宏                  |
| 2. 発表標題<br>ドイツにおける学級会活動の指導に関する一考察 |
| 3. 学会等名<br>中国四国教育学会               |
| 4. 発表年<br>2023年                   |

|                                 |
|---------------------------------|
| 1. 発表者名<br>早川 知宏                |
| 2. 発表標題<br>インクルーシブ教育における学級活動の検討 |
| 3. 学会等名<br>中国四国教育学会             |
| 4. 発表年<br>2021年                 |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>早川 知宏                        |
| 2. 発表標題<br>ドイツにおける児童会・生徒会活動の組織方法に関する一考察 |
| 3. 学会等名<br>中国四国教育学会                     |
| 4. 発表年<br>2020年                         |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

|  | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|